一、石原箕輪岡田三輪
二、勞農黨ニ關スル件
大會ニ關スル態度
三、待遇改善ニ關スル件
八月七日關東勞働組合會議

本部報告は其の儘本日報にて詳細に通知してあります。
御承知の事と存じますから大綱の報告に止めて置きます。
尚各支部の情勢を今後毎月掲載した
いと思いますから必ず報告下さる樣御
願ひ致します。
本部書記

る事にある。而して、ソヴィエト・デモクラシイに對する一般勞働者大衆の訓練は、實に大會の運營にある。從つて、大會の運營如何は、其れ自身の本來の意義を充分發揮させる事ができるやうな事があれば、其れは大會全體の恥辱であり、其の責任は組合員全體が負はなければならないものである。

(三)

大會の大きなはたらきは、組合の全運動の指導方策を討議決定する事である。即ち、組合の運動を計畫的に押し進めてゆく爲に、なくてはならない政策を決定することである。

我國の勞働運動の全體の進歩は、曾て世界に於ても見なかつた程急速である。從つて、此の急速なる進歩に伍して、自らを向上發展せしめる爲には、運動は單なる其の日くらし、デタラメであつてはならない。常に、組合として、一定の方針と政策を把持して、其れによつて組合の進退を決しなければならぬ。

即ち、我が本年度大會が、我國現下の勞働運動の全傾向にかんがみて、殊に重大なる性質を帶びてをる所以であると同時に、大會の決議や方策の必要且重大なるを論ずるに當つて、最後に一言附け加へておきたい事は、この必要且重大なる決議や方策が、迅速に且忠實に、實行に移されなければならないと云ふ事である。

―(以下關外へ續く)―

時評

◎世の中に「ダラカン」と云ふ不快な詞がある。我々の記憶する所では、所謂資産黨」に對立する、所謂資言葉に買言葉の一種だ、位に思つていた。そこで、我々はできることなら、此の世の中から、少くとも、無産階級運動の中から「ダラカン」と現在の日本の無産階級運動にあり得ない共産黨と云ふ言葉をなくしたいものだと考へていた。

最近某事件に關聯して、又々、ダラカン及共産派が一しきり騒がれた。其の時も、實は我々は、兩者が果して何を意味するかをハッキリと認識する事ができなかつた。所がはしなくも、此の二つの意味が極めて明瞭に了解しうる機縁を與へられた。其れは、其の同じ某事件に關聯して、我市從業員組合の某君が、事件の報告會に出席した爲に所謂「ダラカン」と呼ばれてをる人々の側から、「共産派」と銘打たれてしまつた事だ。

此の事實からして、我々は少くとも次の事實だけは明らかに知る事ができた。嚴正に申立の立場を守るもの、階級的正義觀の爲に鬪ふもの、階級的立場から事物の眞相を批判せんとするもの、此れ等が共産派とよばれるものである少くとも、共産派と簡單に片づけられてをる人々の中にはかうした組合の人々が多數にあるものと思ふ。

◎市電從業員組合、大自治會が一ケ月以上もたつた今日尚

内紛をつづけてをる事は我國勞働運動全體の上から云つて最も大きい不幸の一つだ。我々は、紛爭其のもの、的確な材料を充分もつていないからして、其の兩方の何れが正しいか、何れが誤つてをるかを云ふだけの自信はない。此の事實を通じて、我々の痛切に感じた事は、右の不幸なる内紛如に基いていると云ふ事實だ。組合の會計の問題は非常に重大だ。かるが故に、除名派も被除名派も、もつと鎭重に、もつと撤底した手段を執る可きであつた。絶對に、絶對に、的な策略に問題が利用さる可きでなかつた。被除名派は何故もつと、執拗に會計の不備と疑問を民主主義的な方法で其れ〳〵の機關に、說明をもとめる事をしなかつたか。組合費ボイコットと云ふ樣な直接行動の代りに、彼等は、飽くまで正々堂々と、組合員大衆に訴へて、組合の機關を通じて此れを行はなければならなかつた。

被除名派が、幾分其の手續きに於て誤りあつたにせよ、自働車部全體を、團體的に、しかも、わずか七十幾人位の中央委員の決議によつて、除名を斷行した行爲は、實に、不穩當だ。しかも其の七十幾人中の廿五人以上は除名に反對だつたと云ふのではないか。組合の機關はどこまでも、組合の公器であつて、斷じて官僚的なものであつてはならない。組合の問題は、宜しく組合員の輿論によつて決せらる可きものだ。

勞農黨が、其の創立當初に期待された程の活らきをなし得ず、殊に、其の支部組織の方面に於ていたく停滯しているのは、一方に左右兩翼と云ふ樣なヘタイの知れぬ内部的分派の對立關係が重大な原因をなしてをる、と云ふ人があるが、亦或人は、組合支部構成の問題に對して、各加盟組合間に未だ定まつた方針のない事が、其の一原因だと云ふ向きもある。我々は、右の二つの何れに就いても、其の根據を見出すに苦しむものだ、先づ第一に就いて云ふならば、勞農黨は、最初から、其の創立過程に於て既に左右兩翼を抱含していたのであつて、で きてから兩翼が生じたものではない。即ち、勞農黨は、左右兩翼、勞働者農民、中間階級がお互ひの利益を擁護する爲に、或は、政治的一致の行動をとる爲に、小異をすて、大同に就いた結果でき上つたものではないか。然らば、勞農黨立黨の根本基礎が斯く定まつている以上、今更左右兩翼の排斥反撥が黨の進展を阻害しているとは、我々にはどうしても受取れぬ。

次に、右の理論からしても明らかである如く、勞農黨の支部は、勞働者、農民及中間階級のできるだけ廣汎な部分を抱含する地域的組織を持つ可きではないか。支部が組合單位でなければならない。と云ふ如きは、どうしてもうけ取れぬ。黨は單なる組合同志の協議機關でなくして、組合自身を、少くとも政治運動の範圍に於て、

(以下關外へ續く)